

(財)日本クリスチャンアカデミー 関西セミナーハウス

活動センターだより

2008年度 第1号 (7月28日発行)

2008年度 第1回 修学院キリスト教セミナー

「建築家ヴォーリズの真の目的」

2008年4月5日 (土) 14:00 ~ 17:00

講師：奥村直彦 (日本キリスト教団 安土教会牧師)

ウィリアム・メレル・ヴォーリズ建築開始百年にあたり、各地でヴォーリズ展が開催されている。時宜にかなう形で、ヴォーリズ研究の第一人者である奥村直彦氏をセミナーのゲストとして招くことができたことは幸いだった。奥村氏は、近江兄弟社学園教諭、校長、学園長、近江兄弟社理事、事務局長、「湖畔の声」編集長等を歴任し、ヴォーリズにも直接薫陶を受けている。

奥村氏によれば、ヴォーリズは、1880年米国カンザス州レヴンワースに生まれ、コロラド州デンヴァーの高校で学んだ後、コロラド大学に進み、学生YMCAの運動に参加、カナダのトロントで行われたSVM (海外宣教学生奉仕団) の世界大会で海外宣教への召命を受けたという。

彼はその後、北米YMCA本部の幹旋で来日、滋賀県商業高校英語教師となる。以後、1908年建築事務所開設。神の国建設を目的とする近江ミッションを結成し、近江八幡を中心に伝道、医療、製薬、教育、社会福祉事業を展開していった。奥村氏は、スライドによってヴォーリズの足跡をイメージ豊かに示してくださった。国内においては彼が手掛けたものとしては、関西学院、神戸女学院、同志社大学アーモスト館、大阪女学院、大丸心齋橋店、明治学院、海外では梨花女子大、上海YMCAなど優れた建造物を挙げるができる。

ヴォーリズは、近江八幡を世界の中心に見立て、琵琶湖にガリラヤ丸を浮かべていた。一柳満喜子と結婚し、1941年に日本に

帰化、一柳米来留となった。奥村氏は、彼の生育環境の三要素として、信仰、音楽、自然を挙げ、彼の活躍の場が実に多岐に渡っていることを示している。私が近江八幡にいた1年間でも、近江八幡教会ではヴォーリズ作の讃美歌1篇236番、「神の国」(地の上に まことの さとりは ひらけて 人をば 愛する想いも さかえよ)は、よく歌われた曲と記憶している。



奥村氏は、ヴォーリズの生き方、スタイルは現在建築を通して受容されているけれども、彼が信奉したカルヴァン派の信仰、神の主権、神の預託の思想はまだ理解されていないと言う。さらに彼の精神とは、超教派、神の預託、神の義と愛に基づく平和、国際主義教育であると示し、彼の残しためざましい活躍の足跡は、驚異であるが、彼の真実の姿は、自ら著わした「失敗者の自叙伝」に謙虚にまとめられていると指摘した。

「私たちは文字どおり、聖霊の導きに
従って生きている。たとい迫害があり、一
見失敗と見えるような時も決して困難に捨
ておかれることはなかった。失敗は自分自
身のあやまちから起こるのだ。何か障害に
あって、やむなく回り道をしなければなら
ず、自分ではこんなはずではなかったと、
運命をかこつような場合にも、それが後
になって、神のご計画であったと思う経験を

いくらでも思い出すことができる」

最後に奥村氏は、世俗的なヴォーリズ
ブームではなく、彼の生涯に見られる信仰
と生活を学び、世界に発信していきたいと
述べた。ヴォーリズ建築の放つ豊かなメッ
セージの意味に深く想いを馳せた3時間
であった。

報告：入治彦（京都教会牧師）

《参加者アンケートから》

著書には無いであろうエピソード、有難うございました。「建物(環境)が影響を与える」は名言(人間心理を突いた)と同感です。

ヴォーリズ写真展



修学院キリスト教セミナーに合わせて、4月
1日から5日までの6日間、セミナーハウ
スのロビーではヴォーリズ写真展が開催
されました。ヴォーリズの幼少時から晩年ま
での多方面にわたる活動を記録した貴重な
写真約40点が展示されました。朝日新聞
京都版に紹介されたこともあって、多くの
の方々がお来館下さいました。写真パネルは
滋賀県立近代美術館の御好意で借り受けた
ものです。感謝。

2008年度 第1回 開発教育セミナー

「マーシャル諸島の人々と私たち

～ 温暖化と核開発の中で」

5月10日(土) 16:00～5月11日(日) 12:00

講師：中原 聖乃(名古屋市立大学非常勤講師)

1997年、温暖化防止京都会議に太平洋に
浮かぶマーシャル諸島共和国の人々が参加
して以来、開発教育研究会ではマーシャル
へのスタディツアーを数度行ったが、セミ
ナーで取り上げたのは初めてだった。講師
の中原聖乃さんは文化人類学者で、暮らし
を共にした人ならではの話は興味深かつ
た。

セッション1では、今春研究会が作成し

た『足もとから考える私たちの社会～E S
D(持続可能な開発のための教育)実践教
材集』を使い、フォトランゲージとクイズ
でマーシャルの自然、歴史、文化と核実験
について学んだ。ここでの質問に答える形
で、セッション2と3は進んだ。マーシャ
ルはスペインによって「発見」されるが、
人口も資源も乏しかったので放っておかれ
た。ヤシ油が脚光を浴びるとドイツが買収

して経営し、第一次世界大戦後は日本の委任統治領となった。第二次世界大戦で米軍に占領されるとそのまま戦略的な信託統治領とされ、核実験場にされた。中原さんによると、広島型原爆と同じ威力の爆弾を落とすためにはB29が3000～4000機必要で、先進国は安い費用で最大の効果をあげようと核兵器に頼ったといえる。また、基地と核実験の補償金がマーシャルに流れて多量のアメリカの物資が消費され、小さな島では処理しきれないゴミで汚染が深刻だ。そして地球温暖化は先進国のつけをマーシャルが払わされることだが、CO₂を排出しない原子力発電所の推進は新たな放射能汚染を生む。つまり、外部の必要性によってマーシャルは翻弄され、効率化、近代化をめざした結果が今の問題につながっているのである。

交流会では、南洋群島（マーシャル、ミクロネシア、パラオ、北マリアナ諸島）を統治していた日本の宣伝映画『海の生命線』を視聴した。当時満州は「陸の生命線」と呼ばれており、それと対になっていたことでアメリカのアジア進出に対抗する

意図が理解できた。



中原さんはまた、アメリカが核実験に際して人体実験をしてきたことを教えてくれた。それでもアメリカはある程度情報公開をしているが、フランスやイギリスは全くの秘密主義で、研究者は身の危険を感じることもあるという。そして、ジャガイモの芽を取るためやカラフルな花を突然変異で作るために放射線が使われている現実から、平和利用とされる高度な医療、研究を含めて、反核とは何かを考えさせられた。

報告：金山颯子（京都府立桃山高等学校教諭）

2008年度 第1回 「生命の意味を問う」

「生命の定義は可能か」

2008年5月9日（金）18:00～5月10日（土）15:00

講師：シュペネマン・クラウス氏（同志社大学名誉教授）

生き物の仕組みを明らかにしようとする試みは、日に日に急速に進み、留まるところを知らない。その成果は直ちに医療に利用されていく。しばしば生命操作は受精卵や、胎児、あるいは植物状態や脳死状態の人など、自ら意思表示をできない人にまで及ぶ。そこで、人はどこまで生命に介入することが許されるのかが問われる。これに対し、生命操作はもう一つの生命を助けるために必要なのだと主張される。ここで、生命はどう定義されるのかが問題となる。こんな背景の下で、このプログラムは持たれた。

講師は、本財団理事長で、本年3月まで長

年同志社大学で哲学の教授を務められたシュペネマン・クラウス氏である。同氏は、生命に関する考え方が古代から現代に至るまでどう変遷してきたかを、まずギリシャの思想を基点とした哲学の流れに沿って紹介した後、これを背景にしつつ展開されたキリスト教神学の流れの中ではどうであったかを、カトリック神学とプロテスタント神学の違いに重点を置きつつ紹介し、最後にボンヘファーが両者に内在する問題を克服するものとして、究極のものと究極以前のものを区別する生命概念を提唱し、それが現在のプロテスタント教会の生命倫理の枠組みを形成していると、述べた。

同氏によれば、哲学の流れの中で、人間の生命を自然現象の一部として捉えようとする立場は、自然主義と呼ばれる主張を生み出し、人間の生命を自然を超越する自由な存在として捉えようとする立場は、意識のあるもののみを人間とするパーソン論を生み出し、共に有効な倫理を生み出し得なかった。



これに対しキリスト教では、人間を神の前の存在として理解しようとしたが、カトリックとプロテスタントでは、その視点を大きく異にした。前者においては、人を神が創造し、神を認識するものとして理解するが、後者においては、人間を罪人であり、イエスの十字架と復活を通してしか義とされないものとして理解する。その結果、ボンヘッファーによれば、カトリックの創造の絶対化は、世界の現状を容認する妥協を生み出し、プロテスタントの救済の絶対化は、世界の具体的問題を無視するラディカリズムを生む。これを越えるものとして、ボンヘッファーは「究極のもの」（人は恩寵によってのみ義とされること）と「究極以前のもの」（人間であることと善くあること）を区別し、それを切り離さない生き方が大切だとする。

二日間、延べ8時間に亘る、緻密な論理の展開による密度の濃い講演と話し合いであった。準備されたレジメは、A4版15ページにぎっしり書き込まれていた。しかし、講師は、難しく、抽象的な哲学的、神学的概念を多くの身近な譬えを随所に引いて説明したので、一般12名、学生4名の参加者は、必死になってその話しに最後までついて行くことができた。終わった時、参加者の中に大作業を終えたさわやかさがあった。

省みて、日本では、古来生命をどう捉え、生命とどう向き合い、どんな論理を展開してきたのであろうか。西洋のたどってきた哲学、神学の流れ、そしてボンヘッファーの行きついた論理を踏まえて、遺伝子操作によってどんな細胞でも作り出せるようになったこの時代にあって、生命操作技術において世界の先端をいくこの国にあって、説得力のある生命論をどう構築できるかが問われている。それは、この国において哲学、神学を自分の業として引き受けた者の避けることのできない課題である。

報告：小久保正（中部大学生命医科学科教授）



《参加者アンケートから》

- ・先生ご自身の人間に対しての、生きることに對しての姿そのものに“出会った”という想いを受けました。哲学、神学をこえてシュペネマン先生にふれることができたことがとても感謝です。
- ・私は「神学」は全く未知の世界でしたが、資料を整えてくださり、順序づけに従って、丁寧にご説明頂き、カトリック神学、プロテスタント神学の知識を得ました。先生のご講義を受けることができて、感謝しております。

第1回京のキリシタン史蹟を巡る
洛西編
6月7日(土) 13:00-17:00

日本バプテスト連盟京都洛西教会牧師の杉野榮先生の著作「京のキリシタン史蹟を巡る」の出版を受け、その中に紹介されているキリシタンゆかりの地をマイクロバスで巡ってみようという企画の第一弾。幸い参加希望者が多くキャンセル待ちが出るほどであった。巡ったコースは、京都洛西教会→妙心寺春光院→大徳寺瑞峯院→フランシスコの家で、最後のフランシスコの家では、26聖人が京都で捕らえられ、長崎まで行進させられた様子を描いたビデオを鑑賞し、収集されている多くのキリシタン資料を目にする事が出来た。カトリック、バプテスト、ルーテル、福音自由教会、改革派、教団と、実に多くの教派の方々が集まり、文字どおりエキュメンカルな集まりとなった。報告：事務局

《参加者アンケートから》

本の中の写真の鐘等を実際に見られて良かった。又、杉野先生のお話には、心をゆさぶられました。

第1回お茶こころえの会
「修学院に春が来ました」
4月3日(木) 10:00-15:00

恒例となっている武田薬品工業の薬用植物園(東洋一の椿のコレクション)の見学と能舞台でのお呈茶・昼食の他に、今年は蓮華寺を訪問して住職の話の聞き、日本庭園を散策した。春の一日をゆったりした気持ちで過ごす事が出来た。報告：事務局



《参加者アンケートから》

京都に住みながら知らないことがいっぱい、改めて京都の良さを感じさせていただきました。

2008年度 第2回 「生命の意味を問う」

「エイズから問われること

～ 囚われからの解放」

2008年5月31日(土) 14:00 ~ 17:30

講師：榎本 てる子(関西学院大学神学部准教授)

「エイズと聞いて何を思い浮かべるだろう」。講師は、参加者にそう問いかけることからこのプログラムを始めた。参加者が挙げたエイズに関するイメージで白板が埋め尽くされた頃、講師はさらにこう問いかけた。「こんなイメージで満たされている中で、突然あなたがHIV陽性だと知らされたら、どんなに戸惑うだろう。あなたが例え

ば20歳の学生だとしたら、子供を胎内に宿している30歳代の主婦だとしたら、40歳代の働き盛りのサラリーマンだとしたら、あるいは、70歳の男性だったら、それぞれ何を思うだろう」。参加者は、数名ずつのグループに分かれてそれぞれの立場の人になったつもりで、身体的、社会的、心理的、霊的痛みがどんなに深刻であるかを考

え合った。

その報告を受けて、講師は、それらの痛みの中で人は何を支えに生きていけるかを、講師がこれまで出会ってきたHIV感染者の例を引きながら、語っていった。講師はHIVを負った人と接する中で、これらの人達が様々な葛藤の中で、次第に目に見えるしほりから解き放たれ、なくてならぬものを発見し、自由になっていくのを見てきた。



講師は再び参加者に問いかけた。「私たちは、どんなに多くの本質的でない、みせかけの事柄に縛られ、それからのストレスの下で生きているか、何が自分を縛っているかを、静まって考えてみよう」。そして、そこから、新しい自分を発見し、別の生き方を発見し、新しい出会いを発見していきたい、と結んだ。

今回のプログラムは、関西セミナーハウスの会議室が、すべて他の団体の予約で埋まっていたので、初めて京都大学YMCA会館（地塩寮）の会議室をお借りして開催した。京都大学のすぐ近くに位置する、京都市の歴史的建造物に指定されている重厚な建物である。日頃多くの学生と接している人が講師であったためか、参加者の大半が学生であった。「大変良い会だった。生きることの意味は何かをあらためて考えることができた。とても解りやすく、楽しかった」とアンケートに書いてくれた。

報告：小久保正（中部大学生命医科学科教授）

《参加者アンケートから》

このような授業を継続して受ける機会がある若い人達は、本当に恵まれていると思います。今日のお話は、ほんの入り口に導かれたただけけど、さらに豊かに深めていられることを想像すると、若い人だけでなく、子どもを持つ親にも、このような場があればよいのに…と思いました。How toでなく、自分でこたえを見出していくことの大切さ、それには真に自分に向き合い、わかりあえる人が必要であること、大切なことを気づかせていただきました。

2008年度 第2回 修学院キリスト教セミナー

「医学と福音に生きる」

2008年6月28日（土）14:00～17:00

講師：梅山猛（梅山医院理事長、元JOCsインドネシア派遣医師）

梅山猛氏は、日本キリスト教海外医療協力会（JOCs）が海外に派遣した最初の医師である。正確には、先ず梅山氏が現地からの要請に応じてインドネシアに出かけることを決意し、追っかけて彼を支えるためにJOCsが作られた。1961年、彼はご夫人と二人の幼児を伴って船でインドネシアへ向

かった。到着するなり、押し寄せる患者の治療に当たった。生活習慣も言葉も異なる地での治療であった。日本では見たこともない病気を含め、あらゆる病気に対処しなければならなかった。現地の困難な事情を本国につぶさに報告することはできなかった。国外退去を命じられる恐れがあったか

らである。孤立無援の感が深かった。3年後一旦帰国し、半年間支援を訴えて再び現地に向かった。そこにクーデターが勃発し、日本から送られた資材も届かなかった。身辺に危険を感じる中でバンドンから50km離れた村によりやく診療所が完成し、彼の6年間の医療協力は終わった。



梅山氏は、いかにしてこのような働きに導かれたのであろうか。同氏は、第2次大戦の末期、徳島県の田舎から、多くの友人が陸軍や海軍の士官学校へ進む時、京都の第三高等学校へ進んだ。そこで肺結核を患い2年間休学後復学した時に、たまたま第三高等学校基督教青年会の洛水寮へ入寮を許された。そこで多くの真摯な先生、友人に出会い、共に祈り、聖書を学びつつ天下、国家を論じることになった。そこで学んだ者の多くは、京都大学へ進み、それぞれの分野でやがて戦後の日本で指導的役割を果たす者となっていった。梅山氏自身は、京都大学医学部へ進み、そこでまた良い師に出会い、進むべき方向を明確にされていた。折りしも、大学1年になった時、日本キリスト者医科連盟が結成され、そこで全国から集まった志を同じくする友人と語り、将来の進むべき方向を次第に明確にされていた。こうした備えのなされた段階で、インドネシアからの求めが伝えられたので、同氏はそれに当然のごとく応じることになった。しかし、梅山氏の決断をご夫人は、どう受け止めたのであろうか。夫人は、この間にこう答えた。「彼があまりに熱心に言うので、一緒に行くことにしました。危険な目にも沢山会いましたが、楽しかったです」

日本の海外医療協力がいかにして始まり、どんな困難を越えて進められたか、戦後の日本に、どんな真摯なキリスト者の群れが起され、そこからいかにして戦後日本の形成に独自の影響を与える青年が育っていったかは、つぶさに記録され、次世代への遺言とされるに値する。

奇しくも、今回のセミナーは、彼が若き日将来の夢を語り合ったその場所、京都大学YMCA会館（地塩寮）で開催された。

報告：小久保正（中部大学生命医科学科教授）



《参加者アンケートから》

- ・地塩寮の雰囲気など、セミナーの雰囲気がとてもよかったです。
- ・若き先生方の信仰に基づいた行動をさまざまな時代の様子と共に感じることができました。
- ・お宅でうかがうのとは異なる雰囲気と貴重な体験とお考えをうかがえて幸いでした。ご苦労様でした。スライドを見ることができてよかったです。

2008年度 第3回 開発教育セミナー

「格差社会に生きる

～ 100円ショップと野宿者問題」

7月5日（土）16:00～7月6日（日）12:00

今回は、100円ショップと野宿者をテーマとして取り上げたワークショップを体験しながら、私たちの足もとで起きている様々

な問題と重ね合わせて考えようとする二日間であった。

3セッションともに30名を超える参加者があり、「足元から考える私たちの社会」という教材集を元にしたセミナーへの強い関心が伺えた。その背景には、原油・穀物価格の高騰やますます厳しくなる格差の問題が、私たちの暮らしに直接的に影響を与えるようになってきたことがあると思われる。



第1セッションでは、河原でパーベキューをもしずるとしたらという設定で、100円ショップで買い物をすると食べ物から道具まで、あらゆる物が買いそろえられるということが判った。その中で、90%以上を中国から輸入している割り箸に注目し、なぜ安い価格で生産できるのか、またその背景で何が起きているのかをロールプレイを通して体験した。

第2セッションから第3セッションにかけては、野宿者がどのような暮らしをしているのかをフォトランゲージなどで学びながら、野宿者が生み出される社会の仕組みや排除の構造をロールプレイなどを通して、議論していった。

最後にそうした問題を抱えながら、私たちができることを時間軸に沿ってグループで考えた。

今回は教材の検討という側面もあり、参加者から率直な意見が出された。「完成品の伝達というより、未完成なものをぶつけてみんなで練り上げていこうという姿勢が新鮮だった。」「まだまだ試行段階と思われるワークショップもあったが、全体的によく練られていたと思う。ただ、関心の高い者の集まりなので、多様な意見も出て活発な話し合いになったが、すぐ正解を求めたがる生徒に対して、未熟な自分がうまく展開できるか疑問である。」

どちらのワークショップもその一部を体験してもらい、あとは教材集を参考にするということだったが、教材集を手にした人から、「こんなんほしかった！という本ですね。とってもありがたいです。校務のかたわら、素晴らしい教材研究に頭が下がります。実践記録なども追加していけば、現場で子ども達にこの教材が受け入れられたか、よくわかりますね。」ということばもあり、開発教育のさらなる広がりが今こそ求められる時がきたという感を強くした。

祇園祭が終わり、梅雨も明けて、京都は本格的な夏です。都会人にとっては梅雨はうっとうしいものですが、農家にとっては恵みの雨。今年はすこし降雨量が少なかったような気がしますが、農作物には十分な水が行きわたったのでしょうか。8月に開催予定の第4回開発教育セミナー「私たちの食・水・いのち」は、京北町の農家を会場にしてのフィールドワークで、農作業も行うことになっています。関西セミナーハウスの関係者には「マイ畑」をお持ちの野菜づくり名人が少なくないのですが、活動センター事務局スタッフも、この夏は長靴に麦わら帽子で田んぼの中に入ることになりそうです。猛暑の折、皆さまどうぞご自愛下さい。(編集子)

編集発行人 : 小久保 正 (関西セミナーハウス活動センター運営委員長)

発行所 : (財)日本クリスチャンアカデミー 関西セミナーハウス活動センター
〒606-8134 京都市左京区一乗寺竹ノ内町 23

電話 : 075-711-2115 FAX : 075-701-5256

E-メール : office@academy-kansai.org

ホームページ : <http://www.academy-kansai.org/>